

〔論 文〕

中学生は，日本人教師による英語科ティーム ティーチングをどう捉えているか？

崎 濱 秀 行

I はじめに

ティームティーチングは今日，学校教育の各段階において様々な教科で導入されている。現代教育方法事典（2005）によると，ティームティーチング（以下，TT と記述）とは，複数の教師が授業経営過程における責任を分担しながら各教科・領域等の指導を行うシステムのことを指す。わが国では1962年に初めて紹介され，TT に関する明確な記述が見られなくなった時期はあったものの，1993年からの第6次公立義務教育諸学校教職員配置改善6年計画の実施により，TT が全国的な広がりを見せるようになった。

TT には様々な形態があり，たとえば，同じ教科・領域等を同学年の複数の教師が協力・担当する方式などが挙げられる。また，授業過程における教師の役割については，1) 一人が主に一斉指導をし，もう一人が補助，という型もあれば，2) 2人が交代で一斉指導や個別指導を行う方式なども挙げられる。本研究でとりあげるのは，中学校の英語科におけるTTであり，授業は2名の教師が交代で一斉指導や個別指導を行う方式によるものである。加藤ら（1998）によると，中学校において英語科でのTT実施の割合は数学科について2番目に高いとされている。英語教育自体が学習活動から言語活動に変わっていること，コミュニケーション能力を育成することが英語教育の第一義であることを考えると，英語科におけるTTは重要な授業活動の一つであると考えられる。

本研究でとりあげるのは，中学1年次におい

て日本人教師2名によるTTを実施している場合である。英語科の場合，日本人（JET）＋外国人（AET）の組み合わせによる授業が多くなされているが，本格的に外国語に触れるのが初めてであること，その中で，言語活動やコミュニケーション活動を円滑に進める基礎を築く上では，まずは日本人教師同士によるTTにより，生徒にきめ細かい指導を行うことも重要であると考えられる。

本研究では，実際に日本人教師によるTTを実施している学校を調査対象とし，下記の点について，学習者である生徒がどのように捉えているのかを，主に自由記述の分析を基にして検討した。

1. 日本人教師2名によるTTの良い点（メリット）
2. 日本人教師2名によるTTの困る点（デメリット）
3. 日本人教師2名によるTTの感想

II 方法および手続き

1. 参加者

A 県内私立中学校1年生女子114名（平均年齢13.0歳）

2. 材料

英語科TTに関する質問紙。（1）TTの授業の良い点（自由記述。最大3点），（2）TTの授業の困る点（自由記述。最大3点），（3）TTの授業を受けての感想（1「よかったと思う」～3「よかったと思わない」の3段階）お

よび（４）その理由，以上４つの質問で構成される。

3. 手続き

本研究における質問紙調査は各クラスの学級担任または教科担任を通じて実施された。参加者には英語科 TT に関する質問紙を配布し，各質問に解答するよう求めた。その際，授業を受けての感想は選択肢から最も当てはまる番号に○をつけるよう求めた。また，自由記述部分（TT の授業の良い点／困る点）については，可能な範囲で最大３点まで回答するよう求めた。さらに，授業を受けての感想に対する理由については可能な範囲で記述するよう求めた。調査実施時期は2011年３月であった。調査終了後，各学級担当者によって用紙が回収された。その後，得られたデータについて，自由記述部分はテキストマイニングソフト（TRUSTIA）による分析（参加者の回答の分類：N=114）を，選択式の質問の回答についてはSPSSVer.19.0による分析を行った。

Ⅲ 結果と考察

1. 日本人教師２名による TT の良い点

日本人教師２名による英語科 TT についての良いと思った点を尋ねた。回答の記述は合計202個得られた。１文書あたりの平均語句数は16語，平均文字数は23文字であった。このうち，質問の主旨に合致しない回答，および「たのしい」「おもしろい」などといった，どのような点を指しての回答であるのかが不明確な回答を削除し，最終的に171個を分析対象とした。

また，「教え方がちがうからわかりやすい方をえらべる」といった，２人の教師を指す記述において，たとえば「２人の」という文言を加えるなど，必要な箇所については意味内容に変化が生じない範囲での加筆を行った（計22項目）。その上で TRUSTIA による主題分類を行った。

ジャストシステム（2007）や谷塚・東原（2009）が述べるように，主題分類では，内容が類似している文章同士をいくつかのグループに分類することができる。各分類の特徴を示す「主題」となる語句は，各グループの中から最も特徴的な言葉を自動的に拾い出した上で決定される。また，デンドログラム表示の中のツリーにより，各主題がどのような関係でグループ化されるかを把握することができる。また，ツリー上では，近くに並んでいる分類ほど関連性が高く，遠く離れているほど関連性が低いと判断することができる。本研究における主題分類では計10の分類が得られた（デンドログラムは図１参照）が，デンドログラム表示における分類間の関連性や信頼度，類似度を考慮し，６つのクラスターとして以下の解釈を行った。

第１クラスター（「人」）では，「２人いると，おもしろく授業ができて楽しい」「１人が授業をして，もう１人がわからない人を教えることができるから」など，「２人」であることのメリットに関連する記述が見られた。

第２クラスター（「授業」）では，「授業がスラスラすすむ」「授業がスムーズにすすんでいくこと」といった，授業の効率のよさに関する記述が見られた。

第３クラスター（「日本」「会話」「文」）で

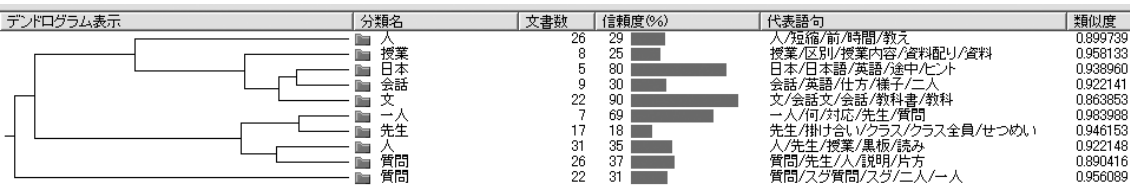


図１ 良い点に関するデンドログラム

Oct. 2013 中学生は、日本人教師による英語科ティームティーチングをどう捉えているか？

は、「日本語も英語も話せるため、話を伝えるのに苦労しない」「会話文を先生が読む時に、声がちがうからわかりやすい」など、英語の会話文のわかりやすさや授業で日本語も英語も使えることに関する記述が見られた。

第4クラスター（「一人」「先生」）では「一人の先生が教えてくれているときわからないことがあったらもう一人に質問できるから」といった記述が見られた。また、第5クラスター（「人」「質問」）では、「一人の先生が説明している時に（その時は説明できないから、）もう一人の先生に質問できるから」「わかんないところとかをもう片方の先生に質問できるから」といった記述が見られた。クラスターは2つあるが、共に、どちらかの教師への質問ができることに関する記述で構成された。

第6クラスター（「質問」）は、「わからない事がスグ質問できる」といった、質問のしやすさに関する記述が見られた。

以上を踏まえると、生徒たちは、TTの良い点として以下の点を挙げていることが伺える。

- 1) (教師が) 2人いること
- 2) 授業の効率が良いこと
- 3) 英語の会話文のわかりやすいこと・授業における何らかの会話で日本語も英語も使えること
- 4) どちらかの教師に質問ができること
- 5) 質問がしやすいこと

2. 日本人教師2名によるTTの困る点

日本人教師2名によるTTの困る点を尋ねた。記述は合計23個得られたが、質問の内容と関係のない回答が6個見られたため、これらを削除し、17個を分析対象とした。良い点と同様、TRUSTIAによる主題分析を行い、信頼度、類似度を考慮した上で3つのクラスターと

して以下の解釈を行った（デンドログラムは図2参照）。

第1クラスター（授業）では、「(授業の)進むのが速い」といった、授業の運営に関する記述が見られた。

第2クラスター（先生）では、「違う先生が説明をすると頭に内容が入らなくなる」といった、2人の先生の特徴の違いに関する記述が見られた。

第3クラスター（「人」）では「2人の言っていることが食い違う時がある」といった、2人の教師の対応に関する記述が見られた。

3. TTの授業を受けての感想に関する分析 (量的分析)

TTの授業を1年間受講してどのように思ったのかを検討するため、生徒に対して日本人教師2名によるTTについての感想を尋ねた。回答は3択（1：よかったと思う 2：どちらともいえない 3：よかったと思わない）であった。1名のデータに欠損が見られたため、113名を分析対象とした。各選択肢の選択者数に偏りがないかどうかを検討するためにフィッシャーの直接確率検定を行ったところ、 $p=0.001$ （自由度2）であった。そこで、残差分析を行ったところ、「1：よかったと思う（N=85）」と答えた生徒が有意に多く、「2 どちらともいえない（N=26）」および「3 よかったと思わない（N= 2）」と答えた生徒が有意に少なかった。

4. TTの授業を受けての感想に関する分析 (自由記述に関する分析)

TTの授業を受けて「1：よかったと思う」と答えた参加者が85名見られた。そこで、どのような点でよかったのかを尋ねるため、

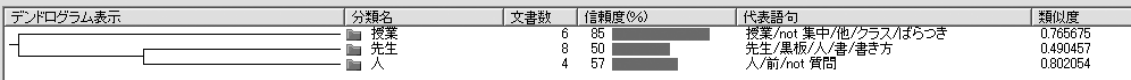


図2 困る点に関するデンドログラム

TRUSTIA による自由記述 (N=68) の主題分析を行った。1 文書あたりの平均語句数は13語、平均文字数は19文字であった。主題分析を行い、計 6 分類が得られたが、デンドログラム表示 (図 3 参照) における分類間の関連性や信頼度、類似度を考慮し、4 つのクラスターとして以下の解釈を行った。

第 1 クラスター (「授業」) では、「わかりやすいし、授業中でも質問しやすい」など、授業に関するポジティブな側面の記述が見られた。

第 2 クラスター (「質問」) では、「すごく分かりやすく、質問がしやすかったから」といった、質問がしやすいことがよかったという点に関する記述が見られた。

第 3 クラスター (「自分的」「英語」) では、「とってもわかりやすく、楽しくできました」など、英語の授業を受けて感じたことに関する記述が見られた。中には、「楽しく授業が受けられて、英語が好きになった」「今年初めて英語の授業を受けたのにすごく実力がついたと思うから」など、英語学習に対するポジティブ評価につながる記述も得られている。

第 4 クラスター (「先生」「人」) は、「すぐ、先生に相談できる」「2 人いるから手をあげたらすぐ来てくれるのがうれしい」「2 人いると 1 人と比べて楽しい」など、生徒自身にとっての教師との関わりやすさや教師への親しみに関連する記述が見られた。

Ⅳ 総合考察

以上の結果を踏まえ、日本人教師 2 名による英語科 TT を中学 1 年生がどう捉えているかを検討する。

まず、良い点の中身として、1) (教師が) 2

人いること、2) 授業の効率が良いこと、3) 会話がわかりやすいこと・授業で日本語も英語も使えること、4) どちらかの教師に質問ができること、5) 質問しやすいことが示された。

石田ら (2008) は、TT のメリットとして、英語が苦手な学生が多いクラスでも個々のつまずきへの対応がしやすいことを挙げている。中学校において、英語科は従来、学習者である生徒が初めて触れる教科とされてきた。近年では小学校においても英語教育が導入されつつあるものの、中学校 1 年次は英語教育の中では初期にあたると言える。そのため、言語活動の遂行やコミュニケーション能力育成を考える上で、まずはその基礎を固めることが極めて重要であろう。その点を考慮すると、会話がわかりやすいこと、どちらか一方の教師に質問ができること、質問がしやすいことなどは、本研究における TT が持つ良い点であると考えられる。加えて、授業で日本語も英語も使用できるという点は、石田ら (2008) とは異なり、日本人教師 2 名による TT が持つメリットであると考えられる。

もちろん、2 名の教師の対応の違いや違いへの戸惑いといった「困る点」に関する回答も 17 個挙げられてはいた。しかしながら、実際に 1 年間授業を受けた感想としては「よかったと思う」と答えた参加者が有意に多かった。また、理由として、授業に関するポジティブな側面 (「わからないことが、授業中に聞いて教えてもらえるから」など)、質問のしやすさ、教師との関わりやすさや教師への親しみ (「2 人いるから手をあげたらすぐ来てくれるのがうれしい」「2 人いると 1 人と比べて楽しい」など) が見られた。クラスターは異なるが、含まれる内容はおおむね、「良い点」として挙げられた

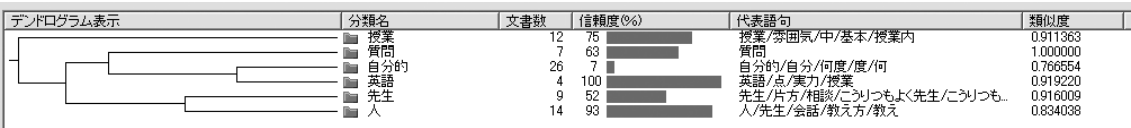


図 3 感想のデンドログラム

Oct. 2013 中学生は、日本人教師による英語科チームティーチングをどう捉えているか？

事項と重複していた。加えて、「楽しく授業が受けれて、英語が好きになった」「今年初めて英語の授業を受けたのにすごく実力がついたと思うから」など、英語学習に対するポジティブ評価につながるような回答も得られた。このことを踏まえると、日本人教師2名による英語科TTにより、実際に英語学習の何らかの側面において向上が見られたことが考えられる。たとえば生徒の一人は、TTの授業を受けて「よかったと思う」ことの理由として、「英語の成績があがった」ことを挙げていた。

ただし本研究では、実際に向上が見られたのか、また、向上が見られたとすれば特にどのような側面での向上が見られたかまでは詳細に検討されなかった。よって、今後は本研究のようなTTによって生徒のどのような側面に向上が見られたのかを検討する必要がある。今日の英語教育の目的を考慮すると、言語活動やコミュニケーション活動等にもたらす効果について何らかの検討が必要であろう。

V 全体のまとめ

本研究では中学1年生を対象とし、英語科において日本人教師2名によるTTを行うことの良い点、困る点、授業を受けての感想をたずねた。生徒から得られた回答を分析した結果、良い点としてはおおむね、「英語の会話文のわかりやすいこと」「授業における何らかの会話で

日本語も英語も使えること」「どちらか一方の教師に質問ができること」「質問がしやすいこと」などが挙げられた。「2人の対応が異なる」など、2名の教師による授業の困った点（デメリット）が17記述見られたものの、授業を受けた感想としては「よかったと思う」と答えた生徒の数がそれ以外の生徒に比べて有意に多かった。

【謝 辞】

調査実施にあたり御協力を賜りました、聖霊中学校英語科の先生方、2011年度1年生の皆様
に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 石田毅・大野顕子・野島伸仁（2008）。サレジオ高専の英語教育とチームティーチング サレジオ工業高等専門学校研究紀要, 34：147-153。
加藤幸次・成田幸夫・松本光弘（1998）。チームティーチングの授業（中学校） 国土社。
ジャストシステム（2007）。評価分析システム TRUSTIA <http://www.justsystems.com/jp/trustia>（参照日2013.06.01）。
谷塚光典・東原義訓（2009）。教員養成初期段階の学生のティーチング・ポートフォリオのテキストマイニング分析：INTASC 観点「コミュニケーション」に関するリフレクションの記述から 日本教育工学会論文誌, 33（Suppl.）：153-156。
日本教育方法学会（編）（2005）。現代教育方法事典 日本教育方法学会。

（2013年7月19日掲載決定）